



Title	小学生の宿題と家族負担に関する研究
Author(s)	阿久津, 真梨子
Citation	教育福祉研究, 22, 63-72
Issue Date	2017-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67826
Type	departmental bulletin paper
File Information	63-0919-6226-22.pdf



小学生の宿題と家族負担に関する研究

阿久津 真梨子

1. はじめに

本研究の目的は、小学生の宿題への家族の関わり方とそのことによる負担感を明らかにすることである。関わり方を明らかにするにあたり、その前段階として、小学生がどのような宿題に取り組んでいるのかを確認する。また、教師の宿題観と家族にとっての宿題の捉え方のギャップについて考察する。

小学生の宿題に関する研究は少ないが、学童保育の分野において宿題をめぐる議論がある程度なされてきた。そこでは、LD等の発達障害のある子どもの問題や家庭の状況との関係で、宿題に困難を抱える子どもの存在がしばしば語られている(丸山 2013)。

宿題の主な役割としては、①反復練習、②授業で扱えなかった内容を補う、③学習習慣の定着の3点が挙げられる。授業が学習指導要領に基づいて行われるのに対し、宿題の量や内容、頻度は各教師に委ねられている。教師の宿題観は個人差が大きく、それによって宿題の内容や量、宿題をしてこられない子どもへの考え方にも違いがみられる。

三輪(1978)は教師の立場から、プリントや朗読等の宿題は「親の学力差は関係しません。誠意さえあれば、誰にでもできるもの」とし、宿題を忘れてくる子の親は「やはり教育に対する関心が少し欠けている」と考えている。また丸山(2013)は、教員養成学部の学生の多くが、小学生の宿題は「努力すれば誰でもできるもの」であり、子どもに宿題をさせる責任が家庭にあると考えていることを指摘している。竹田・丸山(2013)では、多くの小学校教員が宿題は必要だと考えていた。

子どもの負担に関しては、「子どもにとって負担ということは一切考えなかった」、「負担といえば負担だが、これをせずに既習内容の理解が不十分になることのほうが後々大きな負担になると考えている」といった語りが見られる。

2. 調査概要

(1) 調査方法

本研究では、2016年8～10月にかけ、2種類の調査を実施した。

1) 記録調査

まず、小学生が日々どのような宿題に取り組んでいるのかを把握するため、記録調査を実施した。普段(長期休暇でなく、通常に授業が行われている期間)と夏休みの宿題では内容が大きく異なるため、分けて記録してもらった。調査対象は、小学生の子どもがいる家庭の保護者と小学生の子どもである。本調査では10家庭の協力を得ることができ、小学生の子どもは計17名であった。ただし、記録ノートがあるのは16名分である。記録期間は普段の連続した14日間と夏休み期間である。

各家庭に宿題記録ノートを配布し、宿題の内容やかかった時間、誰かが関わったかなどを記録してもらった。配布冊数は小学生1人につき「通常期間・保護者用」、「通常期間・子ども用」、「夏休み期間・保護者用」、「夏休み期間・子ども用」の4冊である。

夏休み期間についてはノートの配布時期や宿題の進み具合等の都合から、最長で13日分の記録しかとれていない。また、1日も記録がとれていない家庭もある。

2) インタビュー調査

記録調査終了後、対象家庭の保護者に対して1時間半程度のインタビューを実施した。質問内容は大きく分けて、①家庭について、②普段の宿題について、③夏休みの宿題についての3つである。家庭については、家族構成や保護者の職業と年収、子どもの習い事などを尋ねた。普段及び夏休みの宿題については、宿題記録ノートに記入された事柄を基に、宿題への関わり方や関わることでの負担等について質問した。

インタビューに協力いただいたのは、10家庭すべてで母親であった。ただし、父親や子どもが同席していた家庭もいくつかあり、その場合は父親や子どもからも話を伺った。

(2) 調査対象者の基本属性

調査に協力していただいた10家庭の居住地はX、Y、Zのいずれかの地域である。Xは人口190万を超える大都市で、小学校数は200校以上であ

る。YはXに次ぐ規模の中核都市で、50校以上の小学校がある。Zは人口9000人弱の比較的小規模な地域で、小学校数は5校のみとなっている。

調査対象者の基本属性は表1の通りである。なお、J-2については記録ノートがない。

3. 宿題への家族の関わり

本章では、小学生の宿題に家族がどのように関わっているかに注目する。家族が関わるのが前提になっている宿題と、家族が関わるのが前提でない宿題に分類して見ていく。

(1) 普段の宿題

1) 関わるのが前提の宿題

家族が関わるのが前提の宿題にはプリントと音読があった。

プリントに関しては、子どもが取り組んだものを家庭で丸つけをするという関わりがC-1、H-1、H-2に見られた。関わった回数は14日間で延べ

表1 調査対象者の基本属性

	家族構成	父親の職業、年収	母親の職業、年収	子どもの祖父母宅	小学生の子ども	学年	習い事
A	父、母、子3人 (小2、小4、小6)	会社員(土日休み)、 1000万	専業主婦	自宅から 2時間	A-1	小2	学習塾、書道
					A-2	小4	学習塾(週2)、書道
					A-3	小6	学習塾(週2)、通信教育
B	母、子1人(小5)		介護職(8:30~17:00、 日祝・隔週土休み)、200万	近所	B-1	小5	学習塾(週2)、 そろばん、ピアノ
C	父、母、 子1人(小2)	会社員(土日休み)、 400万	フリーランス、 100~200万	自宅から 1~2時間	C-1	小2	学習塾(週2)、剣道 (週2)、スイミング
D	父、母、子2人 (就学前、小2)	会社員(日曜・もう1日休み)、 400万	パート(9:00~16:30、 土日祝休み)、120~130万	自宅から1時間 自宅から20分	D-1	小2	テニス(週2~4)、 スイミング
E	父、母、子2人 (小5、小6)	会社員(日曜休み)、 450~500万	嘱託職員(11:30~17:30、 日・週によって土休み)、130万	市内	E-1	小5	そろばん、習字、英語、百人一首
					E-2	小6	そろばん、習字、英語
F	父、母、子3人 (小2、中学、高校)	医師(ほぼ休みなし)、 1000万	パート(9:00~13:00、 週3日勤務)、80~90万	近所	F-1	小2	
G	父、母、子2人 (小5、中学)	自営業(日休み)、 500万	パート(9:00~14:00、 週4日勤務)、80万	近所	G-1	小5	スイミング、 そろばん、英語
H	父、母、子3人 (就学前、小1、小3)	公務員(土日休み)、 700万	専業主婦	自宅から 1時間	H-1	小1	習字、通信教育
					H-2	小4	習字、通信教育
I	父、母、子3人 (小1、小3、小6)	会社員(月休み)、 450万	パート(10:00~18:00のうち 6時間程度、週5~6日勤務)、100万	自宅から 20分	I-1	小1	アイスホッケー、(児童クラブ)
					I-2	小3	アイスホッケー、(児童クラブ)
					I-3	小6	アイスホッケー
J	父、母、子3人 (就学前、小2、小4)	会社員(土日祝休み)、 300万	会社員(8:45~17:00、 土日休み)、200万	近所	J-1	小2	
					J-2	小4	

注)・習い事の情報は記録調査を開始した時点のものである。回数の表記がないものはすべて週1回である。

21 回であった。これは、プリント全体の 18.1% にあたる。H-1 と H-2 のクラスでは丸つけ用の解答が配布され、C-1 のクラスでは配布されていなかった。C の家庭では母親が一つひとつ答えを確認しながら丸つけをしていたが、この点は特に負担には感じていなかった。

音読が出たのは、C-1 の 2 回のみであった。母親に聞いてもらい、音読カードにチェックをしてもらっていた。音読カードの項目は①大きな声で読めたか、②スラスラ読めたか、③サインである。2 年生が一度に読む文量は少ないこともあってか、かかる時間はプリントの丸つけと合わせて 5 分程度であった。

2) 関わる事が前提でない宿題

本調査では、関わる事が前提でない宿題にも家族が関わっているケースが見られた。そのような宿題を分類すると、「プリント・ワーク」「家庭学習」「その他(裁縫)」となった。ここでは、「プリント・ワーク」「家庭学習」への関わり方を取り上げる。

①プリント・ワーク

J-2 を除いた小学生 16 名への記録調査から、14 日間でプリントは 116 回、ワークは 5 回、宿題として出されたことがわかった。そのうち、関わる事が前提でなかったのはプリント 95 回、ワーク 5 回である。しかし、そのうちのプリント 31 回、ワーク 1 回に誰かしらが関わっていた。

表 2 には、家族が関わる事が前提でないプリント・ワークへの関わり方を示した。なお、家庭でプリントの丸つけをすることが前提となっている C-1、H-1、H-2 は除いた。

関わる事が前提でないプリント・ワークへの関わりがあったのは、A-1、D-1、F-1、J-1、I-2、B-1、G-1、A-3 の 8 名であった。関わりが最も多いのは J-1 の 9 日であった。それ以外の I-1、A-2、E-1、E-2、I-3 の 5 名には、一度も関わりがなかった。

関わり方に着目すると、大きく分けて 2 つのパターンがあった。1 つは、「教えた」パターンである。A-1、D-1、J-1、I-2、B-1、G-1、A-3 に見ら

表 2 関わりが前提でないプリント・ワークへの関わり方

		何日目	内容	プリント・ワークに取り組んだ日数
小 1	I-1			10
	A-1	2	漢字調べの手伝い	10
		12	九九の歌を教えた	
小 2	D-1	1	句読点のつけ方を教えた	8
		3	間違いの指摘	
		4	文章の意味を説明した	
		9	文章問題を教えた	
		10	時計の読み方を教えた	
		12	漢字の書き順を教えた	
	F-1	2	確認	5
		6	確認	
		9	確認	
		10	確認	
		13	確認	
	J-1	1	わからないところを教えた	11
		2	わからないところを教えた	
		3	わからないところを教えた	
		4	わからないところを教えた	
		6	わからないところを教えた	
		7	わからないところを教えた	
		8	わからないところを教えた	
		9	わからないところを教えた	
		10	わからないところを教えた	
小 3	I-2	4	わからないところを教えた	9
		8	漢字を教えた	
		9	わからないところを教えた	
		10	わからないところを教えた	
小 4	A-2			10
	J-2	—	—	—
小 5	B-1	3	計算方法を教えた	11
		5	文章問題の考え方を教えた	
	E-1			6
	G-1	13	わからないところを教えた	6
小 6	A-3	4	漢字のヒント出し	8
		5	漢字のヒント出し	
		12	漢字のヒント出し	
	E-2			2
	I-3			3

注) ・J-2 は記録がないため不明。

れ、大半の関わりがこちらに分類された。子どもから「わからない」と質問されて教えることもあれば、母親が付きっきりで宿題を見ているなかで教えることもあり、宿題の内容や取り組む場所によって関わり方は異なってくる。例えばA-1の12日目は、九九の問題が出たことをきっかけに九九の歌を母親がインターネットで調べ、一緒に練習していた。また、D-1の内容を見ると、句読点のつけ方や漢字の書き順等、かなり細かいところまで家族が見ていることがわかる。

もう1つは、「確認」したパターンである。D-1の3日目とF-1に見られた。F-1については、プリントに取り組んでいる最中の関わりはなく、終わった後に母親が確認していた。

②家庭学習

14日間で1日以上家庭学習に取り組んだのは10名である。そのうち、家族の関わりが前提になっているものはなかった。なお、本研究での「家庭学習」は、家庭学習ノート等を学校に提出するものに限定した。塾や習い事の宿題等、学校と関連のないものは含まない。

表3には、家庭学習への関わり方を示した。

家庭学習への関わりがあったのは、H-1、J-1、H-2の3名であった。H-1、H-2は家庭学習に取り組んだ日は必ず母親が関わっている。H-1もH-2も約束しているわけではないが、終わったらノートを母親に見せることが習慣化しているということであった。

また、H-2への関わり方で特徴的なものが、1・6・8日目の「内容を（一緒に）考えた」と「問題作り」である。これは、家庭学習で何をするかについて母親も一緒に考えたり、提案したりしていることを示している。また、「問題作り」をした6日目には、面積（算数）の問題を母親が考え、それを子どもが解いている。家庭学習は基本的に、何をするか自分で考えるが、何をするか決めること自体が、小学生にとっては難しい課題であるようだ。これはHの家庭だけでなく、A-3やG-1の母親も同様のことを話していた。記録期間中にはなかったが、題材がないと家庭学習がしにくい

表3 家庭学習への関わり方

		何日目	内容	家庭学習に取り組んだ日数
小1	H-1	2	確認、漢字の書き方を教えた	4
		8	確認、直し	
		9	確認	
		13	確認、直し	
小2	J-1	1	練習させる漢字をノートに書いた	10
		2	練習させる漢字をノートに書いた	
		3	練習させる漢字をノートに書いた	
		4	練習させる漢字をノートに書いた	
		6	練習させる漢字をノートに書いた	
		7	練習させる漢字をノートに書いた	
		8	練習させる漢字をノートに書いた	
		9	練習させる漢字をノートに書いた	
		10	練習させる漢字をノートに書いた	
小3	I-2			1
小4	H-2	1	内容を一緒に考えた	9
		3	確認	
		6	問題作り、確認	
		7	確認	
		8	内容を考えた、確認	
		9	確認	
		10	確認	
		13	一緒に調べた	
		14	確認	
	J-2	—	—	—
小5	B-1			13
	E-1	—	—	—
	G-1			5
小6	E-2			12
	I-3			11

注) ・E-1、J-2は記録がないため不明。

ので、「(母親が) ネットで無料の問題をおとして、その問題を解いたり」することもあるとのことであった。

J-1には「練習させる漢字をノートに書いた」という関わりが、家庭学習に取り組んだ10日中9日あった。まだ家庭学習に慣れておらず、一人で内容を決めることが難しかったため、母親が毎回のように関わっていた。具体的には、学校の授業で習っている範囲の漢字を母親が教科書で確認し、それをノートに一つずつ書いていた。そして、

母親が書いたあとに続けて、J-1に練習させていたということであった。記録期間から約2か月後に行ったインタビューの時点では、漢字であればJ-1一人で家庭学習ができるようになっていた。一人でできるようになってからは母親は関わっておらず、上記のような関わりは一時的なものであった。

一方、きょうだいであるJ-2の家庭学習には、母親はあえて関わらないという選択をしていた。J-2が自分で考えて取り組もうとしているので、自主性を尊重したいということが理由である。J-2の担任には、母親から「家庭学習の内容が適当だと思うけど、それは子どもが自分で考えてやっているから」と説明しているということであった。

(2) 夏休みの宿題

1) 関わるのが前提の宿題

夏休み期間で家族が関わるのが前提になっている宿題は、「プリント・ワーク」「1行日記・生活表」であった。

① プリント・ワーク

「プリント・ワーク」は、記録なしのJ-2を除く16名に出されていたが、そのうち、家族の関わりが前提であったのは14名であった。普段の宿題の場合、家庭でプリントの丸つけをするよう言われているのはC-1、H-1、H-2のみであるが、夏休みの場合は家庭で丸つけをするケースが大半を占めている。

表4に、プリント・ワークに関わった人と関わり方を示した。

関わりが前提である14名全員が「解答を見ながら丸つけ」をしてもらっている。ほとんどが母親であるが、H-1の丸つけには父親も時々関わっていた。J-1は祖父母宅でプリントを進めたが、丸つけはすべて母親が行っていた。普段の宿題では丸つけ用の解答が配られない家庭もあったが、夏休みに関してはすべての家庭で解答が配布されている。

また、F-1のクラスでは、「取り組んだあとすぐ

表4 プリント・ワークへの関わり方

		関わった人	解答を見ながら丸つけ	間違いの直しをさせ、再び確認	わからない問題を教える	つきっきりで勉強をみる
小1	H-1	主に母(時々、父)	○			
	I-1	母	○	○		
		きょうだい			○	
小2	A-1	母	○	○		
	C-1	母	○	○		
	D-1	母	○			○
	F-1	母	○	○		
	J-1	母	○			
		祖父母			○	
小3	I-2	母	○	○		
小4	A-2	母	○	○		
	H-2	母	○			
小5	E-1	母	○	○		
	G-1	母	○	○		
小6	A-3	母	○	○		
	I-3	母	○	○		
計			14	10	2	1

に直したほうが頭に入るので、できるだけその日のうちに丸つけしてください」と教師から話があったため、母親もなるべく翌日に持ち越さないよう注意していた。

普段と異なり、丸つけをしなければならないことに負担を感じていた家庭は複数見られた。G-1の母親は、「毎日ではなく、一度にまとめて」丸つけをし、プリントの枚数も少ないとのことであったが、「ちょっと面倒だと思います」と話していた。

Aの家庭の母親にとっては、夏休みは3名分の丸つけを一人で行うことが負担になっていた。「夏休みは3人分の丸つけがあったので大変でした。もう地獄だった。親が手伝うという点で考えたら、夏休みのほうが大変。夏休みも冬休みも、ワーク類は親が丸つけをするように言われるので」という言葉にあるように、小学生が3名いることが負担を重くしているようである。Iの家庭も小学生が3名いるので、母親は「量が多いので大変」と話していた。

② 1行日記・生活表

「1行日記・生活表」は1日の日記を1行ずつ書いたり、目標（夏休み前に各自で設定する）を達成できたか、早寝早起きできたか、手伝いをしたかななどを○△×で記録したりするものを指す。

E-1、E-2のみ、夏休み最終日に「親のコメント欄」を母親に書いてもらっている。その他の場面での関わりはなかった。

2) 関わる事が前提でない宿題

関わる事が前提でないが家族が関わった宿題には、「プリント・ワーク」「読書感想文」「自由研究」「絵日記・作文」「1行日記・生活表」「観察カード」「その他」があった。「その他」には、鍵盤ハーモニカ練習カード、縄跳び練習カード、歯みがきチェックカードが含まれる。ここでは、家族の負担感が大きかった「読書感想文」と「自由研究」を取り上げる。

① 読書感想文

読書感想文が出たのは8名である。そのうち、子どもだけで取り組んだのはI-2のみで、残りの7名には家族が関わっていた。

表5には、読書感想文に関わった人と関わり方を示した。

関わりのあった7名のうち、I-1とE-1は母親が付きっきりであった。

I-1については、夏休み前に「読書感想文の書き方」のプリントが親に配られ、参観日の懇談会でも、「たぶんお母さんたちが手伝うことになると思います……」という話が担任からあったという。つまり、教師も家族（なかでも母親）が読書感想文を手伝うだろうと予想しており、1年生が一人で取り組むのは難しいと考えているということである。母親によると、I-2やI-3が1年生のときも、読書感想文はほとんど母親が考えており、今回も「相当手伝った」そうである。「そも

表5 読書感想文への関わり方

		関わった人	確認・アドバイス	付きっきり	本を選ぶ
小1	I-1	母		○	
小2	D-1	父、母	○		
	J-1	祖父母	○		
小3	I-2				
小5	E-1	母		○	
	G-1	母			○
小6	E-2	母	○		
	I-3	母	○		
計			4	2	1

そも1年生は文が書けない。文字もやっと（書ける）」状態なので、「（子どもが）どう思ったのかを（母親が）書き出して、構成を考えて、子どもに書かせた」。1年生は原稿用紙2枚分書くよう言われているが、母親は「2枚きっちり書ける子は、親がやっている（手伝っている）ってことだと思う。親がどのくらい手伝うかによって、内容も量もかなり変わってくる」と感じていた。

E-1の母親は、初めは子どもだけで感想を書かせようとしていた。しかし、「（感想が）あまりにもひどすぎた」ので、母親が質問しながら感想を引き出した。夏休みの最後のほうに取り組んだので、「朝からやって、ごはん食べてまたやって……と呪われたようにやって」いたと母親は話していた。また、「夏休みの宿題は親がつらい、しんどい」と感じており、その最大の要因に読書感想文を挙げている。

②自由研究

自由研究はJ-2も含めた17名全員が取り組み、I-2以外は家族に関わってもらっていた。

表6には、自由研究に関わった人と関わり方を示した。

関わり方で最も多いのは「材料購入」と「作成、作業、まとめ」で、次いで「テーマ決め」と「図書館に行く」が多かった。「その他」の内容は、お菓子の箱や包み紙をとっておいた（F-1）、写真を撮るために家族でダムに行った（H-2）、進め方の計画を立てた（B-1）、書店で本を探した（E-1）、写真を撮るために車で地域を回った（G-1）である。このように、自由研究は様々な部分に家族が関わっており、A、D、E、Hの家庭の母親が自由研究が大変だったと感じていた。

自由研究では、「テーマを決める」ことが第一の関門となる。H-1、C-1、H-2は子ども自身も何を

表6 自由研究への関わり方

		内容	関わった人	テーマ決め	材料購入	ネットで調べる	図書館に行く	作成、作業、まとめ	その他
小1	H-1	工作	母	○	○		○	○	
	I-1	工作	母	○					
			きょうだい					○	
小2	A-1	工作	母		○			○	
	C-1	工作	父、母	△	○			○	
	D-1	調べ学習	母	○	○	○	○	○	
	F-1	工作	母		○				○
	J-1	工作	父		○			○	
小3	I-2	調べ学習							
小4	A-2	工作	母		○			○	
	H-2	調べ学習	父、母	○			○	○	○
	J-2	工作	父		○			—	
小5	B-1	調べ学習	母	○	○		○	○	○
	E-1	調べ学習	母			○	○		○
	G-1	調べ学習	母	○	○			○	○
小6	A-3	実験	母		○			○	
	E-2	調べ学習	母				○		
	I-3	調べ学習	母			○			
計				6	11	3	6	11	5

注）・J-2は一部記録なし。

・C-1のテーマ決めは、工作キットを見つけた際、子どもが「作ってみたい」と言ったことに対し、「じゃあ自由研究にしたらいいんじゃない？」と母親がアドバイスしたため、△とした。

やりたいか意見を出し、家族と相談して決めたが、残りのI-1、D-1、B-1、G-1は母親がテーマを提案していた。

「作成、作業、まとめ」は、工作であれば組み立て、調べ学習であれば模造紙等へのまとめに該当し、自由研究に占める割合の大きい部分である。子どもが自分で決めたテーマであっても、説明書通りに組み立てることが難しかったり、まとめ方がわからなかったりということが起こっていた。

Aの家庭の母親は、「毎年、私（母親）の自由研究のようになっていたので、なるべく自分でできるのを選んで話した」のだが、「誰の自由研究なんだってくらい手伝うことになっていた。」「作成、作業、まとめ」に家族が関わることは、時間がかかるうえに能力も求められるため、負担を感じる家庭も少なくなかった。また、自由研究は夏休みの最後のほうまで残ってしまうことも多く、時間があまりないなかで取り組むことがより負担感を大きくしていると考えられる。

4. 宿題に関わることでの負担感

家族が宿題に関わることで生じる負担感を「時間的負担感」「経済的負担感」「能力的負担感」に分類した。

(1) 時間的負担感

1) 普段

調査対象の家庭の多くで、母親が中心となって宿題に関わっていた。普段の宿題に関してはほぼ毎日関わっている母親もいるため、「時間」が負担になっているのではないかと思われた。しかし実際は、関わりがあっても1日に5分や10分というケースが多く、時間的な負担感があると答えた母親はいなかった。また、時間的負担感が理由で子どもを塾や学童に通わせている家庭もなかった。つまり、子どもの宿題に頻繁に関わっていても、それを特に負担だとは思っていないということである。

今回の調査対象となった家庭のうち、フルタイムで働いている母親はBとJの家庭の2名のみであった。残りの8家庭の母親は、パート等の比

較的時間の自由が利く働き方をしているか専業主婦であったため、時間的負担感がほとんどなかったのだと思われる。また、母親がフルタイムのBとJの家庭は祖父母が近所に住んでいるため、日頃から協力を得られていることも一因であろう。

2) 夏休み

夏休みの宿題に関しては、時間的負担感のある家庭が多く見られた。これは、宿題の種類が多く、一つひとつの宿題に関わる時間も長いことが要因だと考えられる。夏休みの宿題への関わりのほうが大変だったと話していたなかで、関わる時間の長さを理由に挙げていたのは、A、E、Iの3家庭である。

また、夏休みの宿題で特に時間的負担を感じたとしてよく挙げられたのは、読書感想文と自由研究であった。

(2) 経済的負担感

1) 普段

普段の宿題については記録ノートに項目を設けていないため、インタビューで尋ねた。しかし、経済的負担とそれに伴う負担感に関する話は出てこなかった。

2) 夏休み

宿題のための出費があったのは、「読書感想文」と「自由研究」で、原稿用紙や工作キット、模造紙等の購入があった。しかし、いずれも高額な出費ではなく、子ども1名あたり数百円から1000円程度に収まる範囲であった。Aの家庭では、自由研究のための出費が2000円程度あった。これは負担になる額ではないが、一度に3名分の材料費がかかることで、「意外とかかってしまう」と感じていた。

宿題のために博物館等に出かけた場合、交通費や入館料などで出費が膨らむと思われたが、本調査ではそのような家庭は見られなかった。Jの家庭で絵日記に書くことを作るために遠出をしたり、H-2の自由研究のために家族でダムに行ったりというところでも出費があった。しかし、これらは家族旅行を兼ねていたため、宿題のための出費とは言い切れない。

よって、夏休みの宿題に関しても経済的負担感のあった家庭はなかったと言える。

(3) 能力的負担感

1) 普段

家族が宿題に関わることで負担について、インタビューで最も多く聞かれたのが「学年が上がるとつれて、親が勉強を教えるのが難しくなってくる」ということである。全体の傾向を見ると、4・5年生くらいから難しくなってくるという声が多かった。この点について現時点で困ることがあると答えたのが、A、B、E、Jの家庭である。現時点では困っていないが、学年が上がったときのことを考えると心配だと話したのが、C、Dの家庭であった。

学習内容は理解していても、子どもへの教え方で困ったことがある家庭もあった。D-1の母親も「学校の教え方と家での教え方が違うと、子どもも混乱する」し、「教えても『（学校では）こんなふうに習ってない』って言われたり」した経験があった。F-1の母親も、学校と同じ教え方でないと子どももわかりにくいと言うため、子どもが習ったやり方を教科書で確認してから教えていた。

また、H-2に見られるように、家庭学習の内容を母親と一緒に考えることも、能力的負担がかかっていると言える。家庭学習は、本来であれば家族の関わりが前提でない宿題である。しかし、実際には「何をするか考える」段階でつまづく子どもが多く、家族が手伝わざるを得ない状況になっていた。I-1、J-1は低学年で家庭学習に慣れていないことから、母親が問題をノートに書き、子どもが取り組みやすいよう準備をしていた。H-2の母親も、インターネットを使用して、無料でおとすことのできる問題を探すことがあると話していた。

I-1とH-2の母親は能力的に負担と思える関わりをしているが、大きな負担感はないようであった。いずれもインタビューでの語りからは、子どもの宿題に関わることは仕方ない、そういうものだろうと捉えているように見受けられた。

2) 夏休み

夏休みの宿題は普段の宿題と内容が大きく異なるため、能力的負担感があった箇所も普段とは異なる部分があった。特に、読書感想文と自由研究の2つは家族が関わらざるを得ないケースが多いが、関わる家族には多様な能力・高い能力が求められる。時間もかかる宿題であるため、家族の負担感是非常に大きいようであった。

Hの家庭の母親が大変だと感じていたのは、「旅行なんかの予定もあるなかで、期限までに宿題をやらなければいけない」点であった。これは、子どもの宿題が期限内にすべて終わるようにマネジメントすることを指している。子ども自身が夏休み中に宿題を終わらせようと意識していたとしても、それを計画的に遂行していくことは小学生には難しい場合が多い。そのため夏休みには、母親を中心とした家族が宿題のマネジメントまで行わなければならない、そこに負担感が生じていた。

D-1の母親は、自由研究のテーマ決めからまとめまでほとんどの部分で関わっていたので、付きっきりに近い状態であった。母親自身も「親としては自由研究が1番大変」と語っていた。しかし、その負担感について尋ねると、「全体を通して負担には思っていないです。むしろ一緒にできて楽しかったです。3年生になって自分でやると言い出したら寂しくなりそう」と語っていた。宿題に関わることを楽しいと感じている家庭はほかになく、この語りは特徴的であった。

5. まとめ

本研究で明らかになった点を整理すると、まず初めに、小学生の宿題の状況が挙げられる。これまでは量的にしか行われていなかったが、記録調査によって10家庭の14日分の宿題の取り組み状況を把握できたことは成果と言える。

次に、どの宿題に誰がどのように関わっているのかという点である。また、関わることで生じる負担感を整理し、教師が想像しているより宿題は家族の負担感が大きいことを確かめた。

しかし本研究では、「宿題をすることができる

家庭」の関わりと負担感を明らかにするに留まり、「宿題に困難を抱える家庭」についてはふれることができなかった。しかし調査結果から推測するに、経済的に不安定な家庭や時間に余裕のない家庭では、家族の負担感がより大きくなるであろう。場合によっては関わることができず、教師から「いつも宿題をやってこない家」と見られることも出てくると考えられる。

今回、夏休み期間の記録調査を行えなかった家庭が多く、普段の宿題と比較して十分な考察ができていない。今後、学校現場で子どもや家庭と関わるなかでこれらの点について考察していくことを課題としたい。

文献

丸山啓史（2013）「小学生の宿題に関する教員養成学

部学生の意識—宿題に困難を抱える子ども・家庭への配慮に関わって—」『京都教育大学教育実践研究紀要』第13号、175-184

三輪佳代子（1978）「宿題を忘れてしまったらだめですよ—宿題と家庭教育の意義—」『日本の学童はいく』No.39、14-16

盛満弥生（2011）「学校における貧困の表れとその不可視化—生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に—」『教育社会学研究』第88集、273-294

竹田奈央、丸山啓史（2013）「宿題が困難な子どもに関する小学校教員の対応—小学校教員へのインタビュー調査から—」『特別支援教育臨床実践センター年報』第3号、39-46

（北海道大学大学院教育学院・修士課程修了）